

デーヴォ ガイド



2024.12.2-8

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディポジションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。

7:12 「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。」

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

7:15 それゆえ、彼らは神の御座の前にあって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。

7:16 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。

7:17 御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。また、神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」

とありますから、ここに書かれている人々はイスラエルではなく異邦人、すなわち新約のキリスト者であることがわかります。

「彼らは大きな患難から抜け出て来た者たち」とありますから、地上においては迫害や転徙地異と体験したのでしょうか。それがどの程度かは分かりませんが、少なくとも今の私たちよりも苦しい状況であったとは推察されます。彼らはそのような目に遭いながらも、救いを喜び神様を讃美しています。

患難や迫害を喜ぶ人はいません。しかしかりにそのような状況にあったとしても、主はそれを補って余りある恵と栄光を与えてくださるのです。小さな試練くらいは喜んで受けたいものです。また終わりの日の栄光を期待できるような歩みをしたいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたの中の部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



3日 火曜

黙示録

8:1 子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。
8:2 それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。
8:3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。
8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。
8:5 それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声がとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。
8:6 また、七つのラッパを持った七人の御使いたちは、ラッパを吹く用意をした。
8:7 第一の御使いがラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が現れて、地に投げ込まれた。そして地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。
8:8 第二の御使いがラッパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。
8:9 また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。
8:10 第三の御使いがラッパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の



上に落ちた。

8:11 この星の名は「苦よもぎ」と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

8:12 第四の御使いがラッパを吹いた。すると太陽の三分の一と、月の三分の一、また星の三分の一が打たれたので、それらの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜も同じようになった。

8:13 また私は見た。そして、一羽の鷲が中天を飛びながら、大声でこう言うのを聞いた。「わざわざいだ、わざわざいだ、わざわざい来る。地上に住む者たちに。三人の御使いが吹こうとしている残りのラッパの音によつて。」

第七の封印には7つのラッパの出来事が込められていました。一つの封印に7つの災害があったのです。終わりの日の患難がどれほど大きなものであるかが分ります。

このラッパは一個のトランペットのような楽器と見る必要はないでしょう。ヨハネは幻を見、それをことばで表しているのです。実際に起こる出来事は私たちの想像をはるかに超えたものでしょう。しかし、主の患難は必ず来るということは、肝に銘じておく必要があります。

この患難のきっかけは「香炉を…投げつけた」ことによるものですが、この香炉の煙は聖徒の祈りであると書かれています。私たちの祈りが終わりの日に用いられることも知りましょう。

私たちの祈りは、愛のとりなしや解決を求める願いや、色々あるでしょうが、どれも空を打つようなものでもなく、また空しく消えるものでもなく、天のみわざを動かすほどの力あるものであるということが分ります。この黙示録のことばは真実なものですから、これをいつも覚えて、祈り

の力を実感しながら、力ある祈り手となりましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いやなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4日 水曜

黙示録



9:1 第五の御使いがラッパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。その星には、底知れぬ所に通じる穴の鍵が与えられた。

9:2 それが底知れぬ所に通じる穴を開くと、穴から大きなかまどの煙のような煙が立ち上り、太陽と空はこの穴の煙のために暗くなった。

9:3 その煙の中からいなごが地上に出て来た。それらには、地のサソリが持っているような力が与えられた。

9:4 そして彼らは、地の草やどんな青草、どんな木にも害を加えてはならないが、額に神の印を持たない人たちには加えてよい、と言いつ渡された。

9:5 その人たちを殺すことは許されなかったが、五か月間苦しめることは許された。彼らの苦痛は、サソリが人を刺したときの苦痛のようだった。

9:6 その期間、人々は死を探し求めるが、決して見出すことはない。死ぬことを切に願うが、死は彼らから逃げて行く。

9:7 いなごたちの姿は、出陣の用意が整った馬に似ていた。頭には金の冠のようなものをかぶり、顔は人間の顔のようであった。

9:8 また、女の髪のような毛があり、歯は獅子の歯のようであった。

9:9 また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その羽の音は、馬に引かれた多くの戦車が戦いに急ぐときの音のようであった。

9:10 彼らはサソリのような尾と針を持っていて、その尾には、五か月間、人々に害を加える力があつた。

9:11 いなごたちは、底知れぬ所の使いを王としている。その名はヘブル語でアバドン、ギリシア語でアポリュオンという。

9:12 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。

9:13 第六の御使いがラッパを吹いた。すると、神の御前にある金の祭壇の四本の角から、一つの声が聞こえた。

9:14 その声は、ラッパを持っている第六の御使いに言った。「大河ユーフラテスのほとりにつながれている、四人の御使いを解き放て。」

9:15 すると、その時、その日、その月、その年のために用意されていた、四人の御使いが解き放たれた。人間の三分の一を殺すためであった。

9:16 騎兵の数は二億で、私はその数を耳にした。

9:17 私が幻の中で見た馬と、それに乗っている者たちの様子はこうであった。彼らは、燃えるような赤と紫と硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は獅子の頭のようで、口からは火と煙と硫黄が出ていた。

9:18 これら三つの災害、すなわち、彼らの口から出る火と煙と硫黄によって、人間の三分の一が殺された。

9:19 馬の力は口と尾にあって、その尾は蛇に似て頭を持ち、その頭で害を加えるのである。

9:20 これらの災害によって殺されなかった、人間の残りの者たちは、悔い改めて自分たちの手で造った物から離れるということをしせず、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた偶像、すなわち見ることも聞くことも歩くこともできないものを、拝み続け

た。

9:21 また彼らは、自分たちが行っている殺人、魔術、淫らな行いや盗みを悔い改めなかった。

「いなご」と表現されるものは、闇から出てきます。人々が知らないうちにいつの間にか現れ、世に影響を持つようになります。「いなご」は本来激痛を与えるものではありませんが、いつの間か「死を願う」ほどの「苦痛」を与えるのです。サタン戦略です。

クリスチャンもその正体に気づかないかもしれませぬ。しかし「神の印を持たない人たちに」害を与えることがありますから、私たちの信仰は自分自身を守ることにもなるのです。信じる者には神の印が押されています。

「これらの災害によって殺さなかった人間」は悔い改めませんでした。終わりの日の一連の災害は、まだ神の最後のさばきではありません。神を侮っていた人々、また神に敵対していた人々が「悔い改める」ことを期待してのものなのです。しかし人々はそれぞれでも神を認めようとしないうことが分ります。人は弁解の余地はないのです。

主を認めて信じられるということは何と得がたいことでしょう。人は自分の力では、この超越的な方を知ること、認めることもできないのです。イエス様の十字架も感謝ですし、その意味を教えてください、受け入れることができるようにされたことも感謝です。

伝道している人は、人の力ではなく、主の恵によって救われるように祈り求めましょう。また終りの日を覚えて、今を生きましょう。

- ①神のみこころは？
- ②どんな思いになりましたか？
- ③生き方にどう適用しますか？
- ④この世にあって何を実践しますか？



5日 木曜

黙示録

10:1 また私は、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて天から下って来るのを見た。その頭上には虹があり、その顔は太陽のよう、その足は火の柱のようで、
10:2 手には開かれた小さな巻物を持っていた。御使いは右足を海の上、左足を地の上に置いて、
10:3 獅子が吼えるように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声を発した。
10:4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天からの声がこう言うのを聞いた。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを書き記すな。」
10:5 それから、海の上と地の上に立っているのを私が見たあの御使いは、右手を天に上げ、
10:6 天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを作って、世々限りなく生きておられる方にかけて誓った。「もはや時は残されておらず、
10:7 第七の御使いが吹こうとしているラッパの音が響くその日に、神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりを実現する。」
10:8 それから、前に天から聞こえた声が、再び私に語りかけた。「行って、海の上と地の上に立っている御使いの手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。」
10:9 私はその御使いのところに行き、「私にその小さな巻物を下さい」と言った。すると彼は言った。「それを取って食べてしまいなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」



10:10 そこで、私はその小さな巻物を御使いの手から受け取って食べた。口には蜜のように甘かったが、それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。
10:11 すると私はこう告げられた。「あなたはもう一度、多くの民族、国民、言語、王たちについて預言しなければならない。」

「七つの雷が語ったことは封じ」られて、まだ私たちにその内容はわかりません。主のみこころによって、人には知られることと知りえないことがあるのですから、人間は神の前に高慢になって、何でも分るのだという考えを捨てなければなりません。その上で、黙示録を解釈しなければ、これまでの異端や行き過ぎた行動を繰り返さないともかぎりません。

第七のラッパは最後で、この中にさらに7つの録による災いがあるのです。その前に、「預言しなければならぬ」と、語られます。預言とは神のことばを語ることで、私たちにとっては伝道です。私たちが黙示録を読み、終末の出来事を理解するならば、それは伝道に向かうためのものなのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



6日 金曜

黙示録

11:1 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。

11:2 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけません。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじることになる。

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」

11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

11:5 もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

11:6 この二人は、預言をしている期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

11:8 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

11:9 もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて、その死体を墓に葬ることを許さない。



11:10 地に住む者たちは、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を交わす。この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである。

11:11 しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。

11:12 二人は、天から大きな声が「ここに上れ」と言うのを聞いた。そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

11:13 そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。

11:14 第二のわざわいが過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。

この「二人の証人」は、「ここに上れ」と言われていることから、信仰者でありまた主の働き人であることがわかります。彼らは、エノクとエリヤではないかとも、モーセとエリヤではないかとも言われますが、定かではありません。しかしはっきり分ることは、終りの日のために宣教する人が必要であること、そのような人には主の大いなる力が与えられること、そしてどんな苦難に満ちた生涯でも最後は「ここに上れ」と、主のもとに引き上げられる栄誉にあずかることができるということです。

私たちも終りの日のエノク、エリヤ、モーセとして、この時代に生きる使命を全うしましょう。また終末の視点に立って、今の時代にどのような使命があるのか、祈って考えてみましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



7日 土曜

黙示録

11:15 第七の御使いがラツパを吹いた。すると大きな声が天に起こって、こう言った。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」

11:16 すると、神の御前で自分たちの座に着いていた二十四人の長老たちが、ひれ伏し、神を礼拝して言った。

11:17 「私たちはあなたに感謝します。今おられ、昔おられた全能者、神である主よ。あなたは偉大な力を働かせて、王となられました。

11:18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りが来ました。死者がさばかれる時、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です。」

11:19 それから、天にある神の神殿が開かれ、神の契約の箱が神殿の中に見えた。すると稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。

7つ目の封印の中には7つのラツパの出来事が含まれていて、そのラツパの最後である7番目のラツパが鳴らされました。これには天上の礼拝から始めて、天上の戦いなど多くの出来事が含まれていますが、その最後にさらに7つの鉢（がぶちまかれる）の出来事が入っているのです。気の遠くなるような、終末の出来事の膨大さですが、主のご計画はどれも違えることなく、実現されるのです。

天上の礼拝から始まることは重要です。主はこれら多くの苦難を、ただいたずらに意味もなく起こすのではなく、全ての根源にして、全ての創造者なる神である主を、人々が認めることがその本質



です。たとえ全宇宙の根底を揺るがすような転変地獄が起こされたとしても、またはそこから平和へと転じたとしても、主に敵対する世であるならそれは滅びに定められているのです。なぜなら、主に敵対する者は、自分自身を主とするもので、そのような者同士は戦い合うことになるからです。それでサタンはそのような、神の敵を用いるからです。

あらゆるものが、主への礼拝に帰結することを常に覚えましょう。私たちの日常生活でも、主を礼拝することにつながるという意識、目的で見ましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



12:1 また、大きなしるしが天に現れた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭に十二の星の冠をかぶっていた。

12:2 女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。

12:3 また、別のしるしが天に現れた。見よ、炎のように赤い大きな竜。それは、七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた。

12:4 その尾は天の星の三分之一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

12:5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもってすべての国々の民を牧することになっていた。その子は神のみもとに、その御座に引き上げられた。

12:6 女は荒野に逃れた。そこには、千二百六十日の間、人々が彼女を養うようにと、神によって備えられた場所があった。

この「女」は教会であるとの解釈が多いですが、その場合「男の子」の解釈ができなくなります。「女」は信仰の群れと広く解釈できるかもしれませんが、イスラエルでありその良き代表であるマリア、また新約の教会であり、前者の場合「男の子」はイエス様またはイエスを信じる信仰の群れ、そして後者の場合「男の子」は、携挙されるべきクリスチャン達ということになるでしょう。

それらは違う時代のものですが、天での大いなる戦いの勝利のゆえに地上でも、サタンに勝利して、事が成就したのです。

天の戦いで勝利しているのは私たちであるということ、忘れないで生きましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

